

明治校舎内研究室の思い出

木村 宏

昭和31年6月28、29日のことである。当時大阪市大地理学研究室は実習室を含めて市内西区阿波座中通の明治校舎3階北西隅に位置していた。すでに教授研究室は昭和28年頃、アメリカ軍より一部返還されていた杉本町学舎内に割り当てられていたが、昭和30年秋に全面的返還となり、翌年、明治校舎に分散していた全研究室が移転と決まったのである。

移転には教職員全員が立ち会い、関与するものであるが、何分、当日は授業その他の関係で杉本町学舎に偏り、明治校舎内地理学研究室では当方ただ一人ということになった。一人では到底困難と考え、卒業生その他へ、一応連絡通知してみたが、支障者続出で、結局は当方一人が引かぶることになる。狂い易く微妙な精密器具類や運び難い大テーブル（大実習台）、デスク（地図透写兼用傾斜型）、ボックス



（地形図整理箱）などの多い教室にとって準備には多大の時間と労力を要した。移転当日は大学当局より依頼された業者が運搬するとはいえ、取扱注意事項を明示するのは勿論、器具類の分散や誤送を防ぐため、一々指摘して細心の注意を払い続け、目の廻るような忙しさであった。ようやく大部分を運び終えた頃に、大学院に入学したばかりのM君が駆け付けてきた。遅いながらもよく協力してくれたと思っている。

もともと明治校舎に研究室が決まったのは昭和26年であるが、地理学の研究室に使うためには改装が必要であり、当時未だ珍しかった蛍光灯による照明より大黒板設置、大実習台、地形図整理箱、地図透写兼用傾斜機などの整備にも尽力した。これらが一応揃い、正式に発足したのは昭和27年に近い。以後5年ほど、まとまった実習室を含む共同研究室として広く活用したのであるが、ここに地理学教室がソフト面のみでなくハードの面においても基礎を確立することになったといえる。教室会議はもとより地域の共同調査の企画、準備、整理、討論や地理学特講、講読、実習などの実施、さらに専攻生との話し合い、他教室や他大学との交流などに大いに役立ったことはいうまでもない。ただ戦後間もない頃で、資材難による施設の破損や電気系統の故障などは少なくなかったが、

改装が終った昭和27年頃、研究室より外を眺めると、はるか北北東方には朝（うつば）校舎の一部が見えたが、北側の広い街路の分離帯には街路樹の苗木が育てられていた。（写真a）

やがて2年後には苗木が写真bの如くかなり成長しており、昭和31年杉本町へ移る頃にはすっかり伸びきって、風が吹くたびに心地よくゆれていた。それはあたかも地理学教室の発展拡大を表わしているようであった。

北東方向には夜間授業が始まる頃、市内ビジネスセンターの明りが遠望され、市立大学らしい感じにひたされたこともある。

交通の便は杉本町学舎よりはるかに良好で、海産物問屋のビル前で路面電車を降り、研究室へ直接

向かうか、朝校舎へ事務関係の用事などで立ち寄るのをくりかえしていた。

しかし、平穏な月日のみではない。学内外には種々の問題も起り、時間的にも努力的にもしばしばなやまされた上、朝校舎内における教授会は時として夜遅くまで延々と続き、終電車にぎりぎりのこともあった。間に合わぬ折には朝校舎内で宿泊したこともある。ともかく明治と朝両校舎が余り遠くない600mほどへだてるのみで、用事で往来するにも連絡するにも道仁校舎の頃に比べて事情はかなりよくなったといえる。

研究室には大黒板や大実習台を備えているので実習はいうまでもなく、特別講義や講読なども、大部分この室で行われた。当方にとって用事を進めるかたわら、時折聴講することもでき、後の指導上の参考に何かと役立っている。

図書は乏しい研究室予算より漸次揃えていったが、長谷川講師より寄贈された“地理学評論”のバックナンバーや伴家より特別寄贈の地歴書などは大いにプラスとなった。分類はDCではなく、特別の地域分類により排列したが早期に杉本町舎に移った中央図書館(写真c)とは余りにもへだたっていたことは難点である。しかし、文学部をはじめ、法、経、商学部の研究室が明治校舎に集中している関係上、他の研究室へ出入りし、ひろく通読することができた。当方の「東南アジア東部島嶼地域の歴史地理学的研究」を一段と進めることができたのはこの頃である。

教室による地域共同調査は昭和25年度より奈良県大和平野集村二階堂村(現天理市二階堂)で始めていたが、明治校舎に移ってからは富山県砺波平野散村鷹栖村(現砺波市鷹栖)で行うことになり、昭和27年8月、実習受講学生達と共に同地へ、同年秋には教室員のみで実施している。写真dとeはこの折、当方が撮影した地理写真の一部である。翌28年には五箇山山村調査のために富山県東砺波郡平村へ市大実習受講生のみでなく、経済学専攻生や関西学院大学の地理学専攻生、社会学専攻生をともなって出かけている。(写真f)

さらに、昭和29年度では東砺波郡出町及び周辺一帯(現砺波市内を主)、翌30年度には庄川町付近一帯にまで地域を拡大し、調査の充実をはかっている。

昭和20年代半ばより30年代はじめにかけては朝鮮動乱などの影響で、一時特需景気がみられたが、一般市民の生活向上は戦災などの痛手で遅れ気味であった。しかし、市民はひるまず、明るさを失わずに大阪復興をめざして奮闘を続けていた。あちこちに活気がみなぎり、ただ前進あるのみといった旺盛なバイタリティーにあふれていた。やりがいのある時期であったといえる。

教室員一同は経済的な逆境下にもかかわらず、討論を重ね、教室の発展拡大に可能な限りの力を尽くし、万難を排して邁進していたことをとくに明記しておきたい。

なお、昭和33年度、当方は文部省科学研究費申請のために、明治校舎に存続していた事務局の方へ行ったが、かつての地理学研究室の位置には経済研究所所属のアジア地域総合研究施設が占めており、東南アジア経済専門の尾崎教授により運営されていた(当方は同年度、立教大学内別技教授運営のアジア地域総合研究施設の委員に就任している)。この施設も昭和36年には杉本町舎内、新築の文科系研究棟1Fへ移転しており(地理学研究室は4F)、当方は、研究上、時折資料探索に立ち寄ったことがある。

当方の在任年数は14年（昭和24～38年）であるが、その前半は道仁、明治、鞠諸校舎における勤務である。

未だ戦災の傷跡が大きい上、校舎の分散などにより用事は思うようにはかどらず、時間の割に能率の上がらぬことが少なくなかったが、困難にぶつかる折、しばしば鼓舞、激励をあたえられた教室主任（村松、渡辺両教授）の方々をはじめ、助教授（川喜田、岩田、水津諸助教授）、教員（君塚助手）の方達、卒業生その他の皆さんの面影を忘れることはできない。

（旧教員）



a 研究室より北西方をのぞむ（昭和27年）



b 研究室より北西方をのぞむ。分離帯の街路樹がかなり成長している（昭和29年）



c 返還された杉本町学舎の一部（右端）とアメリカ軍宿舎。ジープが置いてある（昭和30年）

